



ファインスチール

Spring 2023

春



CONTENTS

01 特集1

第21回 金属サイディング
施工例フォトコンテスト

05 特集2

「全国ファインスチール流通協議会」展示会出展報告
宮城・仙台 住宅リフォームフェア 2023

07 ファインスチールを使った 建築設計例 343

素地の家

地と時と共に生きる ——

設計：原田 真宏 + 原田 麻魚 / MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

11 建築めぐり

ウォートルス伝 27 丸山雅子

13 街でみかけるファインスチールの施工例 その51

一般社団法人 日本鉄鋼連盟

第21回 金属サイディング 施工例フォトコンテスト

(主催：日本金属サイディング工業会 後援：一般社団法人 日本鉄鋼連盟)

日本金属サイディング工業会が一般社団法人 日本鉄鋼連盟の後援により、2022年6月1日～9月30日を応募期間として実施した「第21回金属サイディング施工例フォトコンテスト」について、受賞された施工例の写真を中心にご紹介します。



新築部門 最優秀賞

大和ハウス工業株式会社 本店近畿流通店舗設計部 (大阪府)

お施主様の事業内容を建物ファサードに取り入れられないだろうか…。全ての始まりはこの思いからスタートしました。建物のデザインコンセプト『Worldwide SHIPs』を軸に様々な船舶要素を各所に取り入れ、ファサードを構成させています。外部のマテリアル選定において、金属の持つ独特な光沢、質感のある素材にて統一することで全体の一体感を表現できたと思っています。法的にも規制のある地域の為、外壁には施工性及び品質が安定し、且つデザイン性も優れている金属サイディングを選定しました。最後に、当社へご依頼頂きましたお施主様、工事に携わっていただいた全ての関係者、又最優秀賞にご選定頂きました皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



山下 一成さん(主任)

●江口特別審査委員のコメント

新社屋のファサードを印象的にスタイリッシュにデザインした作品。施主様の事業である船舶用コンピューターシステム開発を象徴する「帆」の伸びやかなアールは、丸い小窓を包み込み世界に船出する爽やかな勇気を与えてくれます。全体を包むメタルカラーのサイディングは晴れる時も嵐の時も「帆」を助け、安全に美しく航海(事業)を「順風満帆」に進める陰の立役者となりました。本作品は金属サイディングの機能性の高さを武器にデザイン性ある豊富なカラー、テキスチャーで見事にこのストーリーをまとも上げています。これまで重い冷たいのイメージが先行しがちだった金属サイディングの本来の魅力、本作品が軽やかに風を受け今にもすすと出航しそうな躍動感でブランディングしてくれました。記念すべき作品と評価いたします。

●杉田特別審査委員のコメント

外壁に設置された、とても軽やかなメッシュのスクリーンが個性的な建物です。ファサードのコンセプトは帆船の「帆」とのこと。海上で、「帆」に大きく風を受けて七つの海を進むイメージでしょうね。丸い開口部は、さしずめ帆船の客室の「丸窓」です。建物は、船舶用コンピューターシステムの開発を行う企業の本社屋だそうですが、「世界に帆走する企業」のイメージを表現した、とてもスタイリッシュなファサードとなっています。事務所ビルが最優秀になるのは、初めてのことであるように思います。ともすれば単調になる事務所ビルのファサードですが、開口部のデザインや形状、外壁材の張り分けなど、シャープでエッジの効いたスタイリッシュなデザインに、さらに「帆」が加わり、とても伸びやかなファサードとなりました。今後も、住宅系だけでなく、様々な用途に金属サイディングが使われていくことを願っています。

金属サイディング施工例フォトコンテストは、日本金属サイディング工業会加盟8社が、全国の設計事務所・工務店・金物店・板金店の協力を得て、金属サイディング普及活動の事業として実施しているもので、第21回は全国から2,270作品の応募がありました。新築及びリフォームで建物の外装に金属サイディングを使用したものを対象とし、新築では建物の意匠性・高級感・コーディネート感覚など、トータルでバランスのとれた作品、リフォームでは『施工前⇒施工後』で優れたイメージアップの見られる作品を審査委員会で選考しました。その結果、最優秀賞2作品（新築・リフォーム各1作品）、優秀賞8作品（新築4作品・リフォーム4作品）、入選賞39作品（新築19作品・リフォーム20作品）が選ばれました。

また、東日本大震災発生以来実施している被災地に対する義援金寄付は前年に引き続き総額227,000円（応募作品件数に応じた額）を日本赤十字社を通じ寄付いたしました。

[審査委員会]

- ・特別審査委員 江口恵津子（株式会社ヴェルディシモ代表取締役、一般社団法人日本フリーランスインテリアコーディネーター協会会長）
- ・特別審査委員 杉田宣生（一級建築事務所 HARUハル建築研究所）
- ・当会審査委員 理事・幹事・技術委員・事務局

リフォーム部門 最優秀賞

株式会社Sacks（埼玉県）

この度、写真コンテストリフォーム部門に於きまして、最優秀賞を頂き、大変嬉しく思っております。

金属サイディングの持つ機能性、メンテナンス性、断熱性等の特徴は、オーナー様へご提案する上で、大きな有利性が有ります。昨今の気象状況の変化等も、住宅のメンテナンスをする上で大きなニーズの一つになると思われまます。

加えてデザイン性をお客様の希望に出来るだけ近付ける事で、機能性、美観性の両面でお客様に更なるご満足頂けると思います。

今後も、オーナー様と共に頭を痛めながら、アイデアを出し理想の住まいづくりを目指しながら業界の発展、金属サイディングの普及の一助となる様、努力して参ります。



施工前



施工後



西村 公一さん（社長）

●江口特別審査委員のコメント

もともと角地にうまく設計された建物でそのフォルム自体が目引くものでしたが、外壁リフォームでデザイン性が際立って増した作品です。エクステリアのデザインが秀逸で、今後の金属サイディングはエクステリアガーデンを意識して取り込んでいくと、こんなにも魅力的に変わること示してくれました。

玄関のエントランス部分に木をあしらひ、グリーンを有効に配置しています。それがブルーグレーのシックな金属サイディングに非常に映える印象的なお招きの場を作り出しました。

今後のリフォームの方向性として、エクステリアガーデン、アウトドアの充実が重要視されていきますが、それには金属サイディングの機能性、デザイン性、豊富なカラーなどが、非常に大きな役割を持つことを実際に示してくれた優れた作品です。

●杉田特別審査委員のコメント

リフォーム部門の最優秀は、毎回悩みます。リフォームといっても、単純な張り替えもあれば、建物形状が変わるような増改築を伴う大がかりのもの、また最近では減築もあります。あまり大がかりのものであると新築と変わらなくなりますし、あまり単純なものは印象が薄くなりがちです。ですが、今回は張り替えの好例として本作品が最優秀となりました。

全体にはクールな金属サイディングを用いていますが、玄関部分は木目としています。硬質なファサードの中であって、玄関へのアプローチ部分を柔らかな木のイメージに仕上げたことが成功していると思います。

金属の箱の中にぽっかりと開いた木の空間が、訪れる人を暖かく迎えてくれるような、そんな印象を受けました。



新築部門 **優秀賞**

(株)D・LIFE
(岩手県)

新築部門 **優秀賞**

(株)工藤工務店
(千葉県)



新築部門 **優秀賞**

(株)ルポハウス
(滋賀県)



新築部門 **優秀賞**

Pom アーキテクトデザイン(株)
(三重県)



リフォーム部門 **優秀賞**

(株)FCハウジング (北海道)



リフォーム部門 **優秀賞**

マサキホーム(株) (神奈川県)



リフォーム部門 **優秀賞**

(株)住居時間 (愛知県)



リフォーム部門 **優秀賞**

中部ハウス工業(株) (愛知県)



「全国ファインスチール流通協議会」展示会出展報告

宮城・仙台 住宅リフォームフェア2023

主旨：リフォームに関して様々な悩みや不安を抱える一般消費者の方と、住宅設備・建材メーカー、工事を請ける住宅会社との“出会いの場”となることを目的として開催

会期：2023年1月21日(土)・22日(日)

会場：夢メッセみやぎ

主催：株式会社リフォーム産業新聞社(共催:宮城テレビ放送)



●『たくさんの人に来てもらいたい』展示を展開

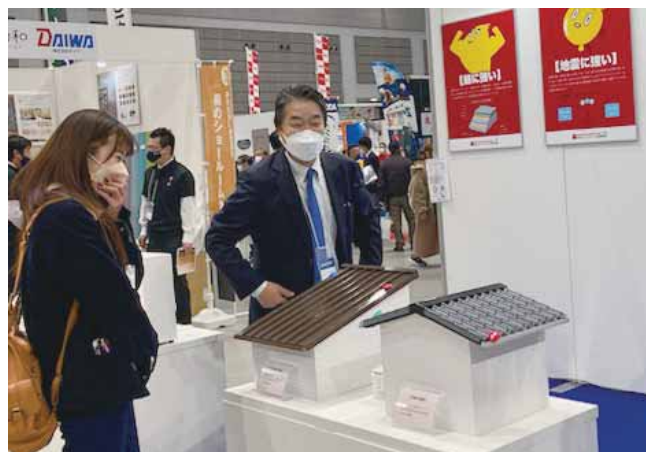
全国ファインスチール流通協議会は、一般社団法人日本鉄鋼連盟建材薄板技術・普及委員会の協賛のもと2023年1月、ファインスチール普及活動の一環として、宮城・仙台 住宅リフォームフェアに出展。今回、展示パネルを全面リニューアル。よりシンプルに分かりやすいデザインに変更しました。また、従来どおり2種類の体感型展示模型と屋根のミニチュア模型、外壁サンプルを展示。来場者にファインスチールをより理解してもらえる展示を展開しました。



「よりシンプルに分かりやすく」展示パネルを全面リニューアル



屋根の重さの違いだけで揺れがかなり異なることに驚き



金属瓦屋根と知らず磁石がくっついてビックリ



遮熱効果の違いを体感

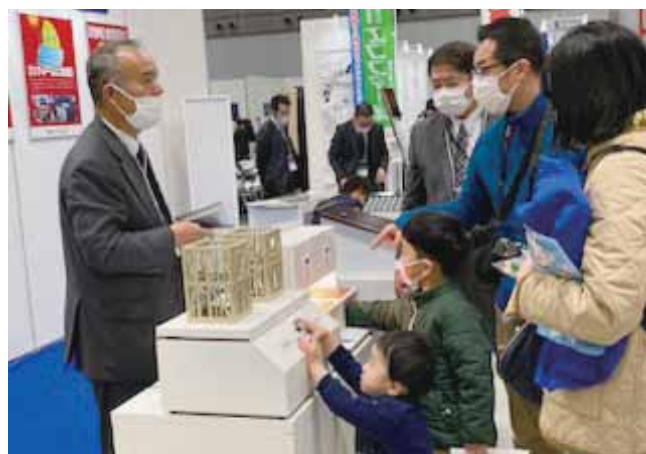


スーパーボール釣りは子供たちに大人気

●コロナも落ち着き来場者多数

新型コロナウイルスの流行も徐々に落ち着き、今年からイベントやヒーローショーも復活。展示会場に来場者が戻ってきました。当ブースでも中止していた「空き缶釣り」に変わり「スーパーボール釣り」を新たに開始。子供たちに大人気だったことはもちろん、他ブースからの見学者も多数見受けられ、大盛況となりました。

全面リニューアルした展示パネルでファインスチールについて理解度を高めてもらい、体感型展示模型で実際に体験してもらおう。お客様に「耐震性」「耐候性」「意匠性」に優れた製品であることを伝えられました。



体感型展示模型に興味深々の子供たち

開催結果

●来場者数報告

1月21日(土)・22日(日)

2日間で8,810名：主催者発表

●当協議会ブースでの配布物

ファインスチール読本

2日間合計 250部配布



来場者で列を連ねる受付



「空き缶釣り」に変わり「スーパーボール釣り」を開始





ファインスチール
を使った
建築
設計例

343

素地の家 地と時と共に生きる

設計：原田 真宏 + 原田 麻魚 / MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

(撮影：写真はすべて、新建築写真部撮影©)

“素地の家”は東京世田谷区の閑静な住宅地にある。世田谷はその地名からもわかるように地形の起伏が多い地域だ。また縄文時代の貝塚、古墳など数多くの遺跡もあり太古の昔から人々に棲み続けられてきた地である。現在は都心に近く利便性が良いだけではなく、多摩川をはじめとする大小の河川や、地形を活かした広々とした公園も多く、自然を身近に感じることができる。

今回紹介するのは建築家の原田真宏・麻魚夫妻の自邸だ。家族は原田夫妻と小学生の男児二人の四人、そして愛犬である。数々の建築作品を手掛けてきた建築家夫妻の自邸は「拘らない

こと」に拘る」ことがコンセプトで、シンプルでありながら奥深さが秘められている。

建物デザインと空間構成

対象地は第一種低層住居専用地域にあり、南西の前面道路と隣家に囲まれたほぼ正方形に近い敷地である。

ガラス面が多く開放的な印象的な外観と木材を基調とした温か味のある室内空間の“素地の家”は、1階にエントランスから続くセミパブリック空間のSOHOと小上がりの和室、その奥にプライベート空間である2部屋の寝室がある。エントランスにある階段を上がると

リビングダイニング、浴室、子ども部屋がある。

地域とのつながり

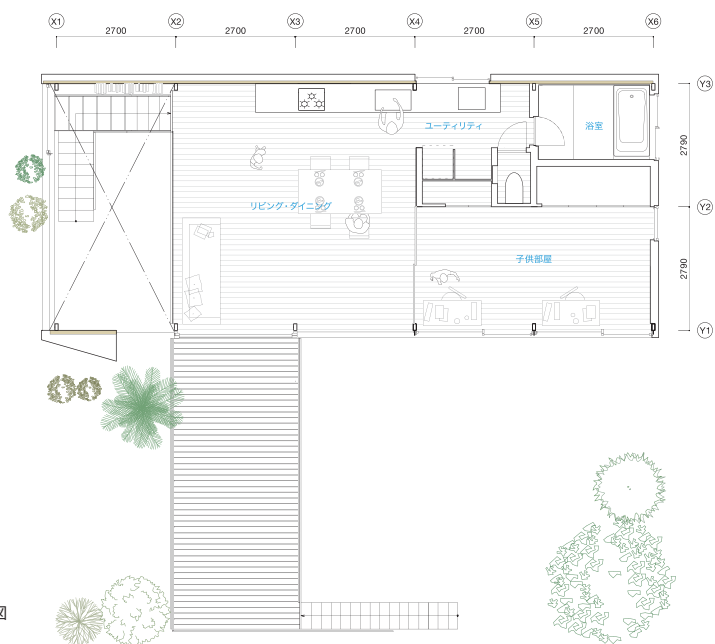
建築を設計する際に周辺環境との関係を考慮することは多いが、原田夫妻は「土地柄を読む」ことからその建築の可能性を探るという。“素地の家”も土地柄を読むことから敷地内の建物や庭の配置が考えられた。

－ 庭の可能性 －

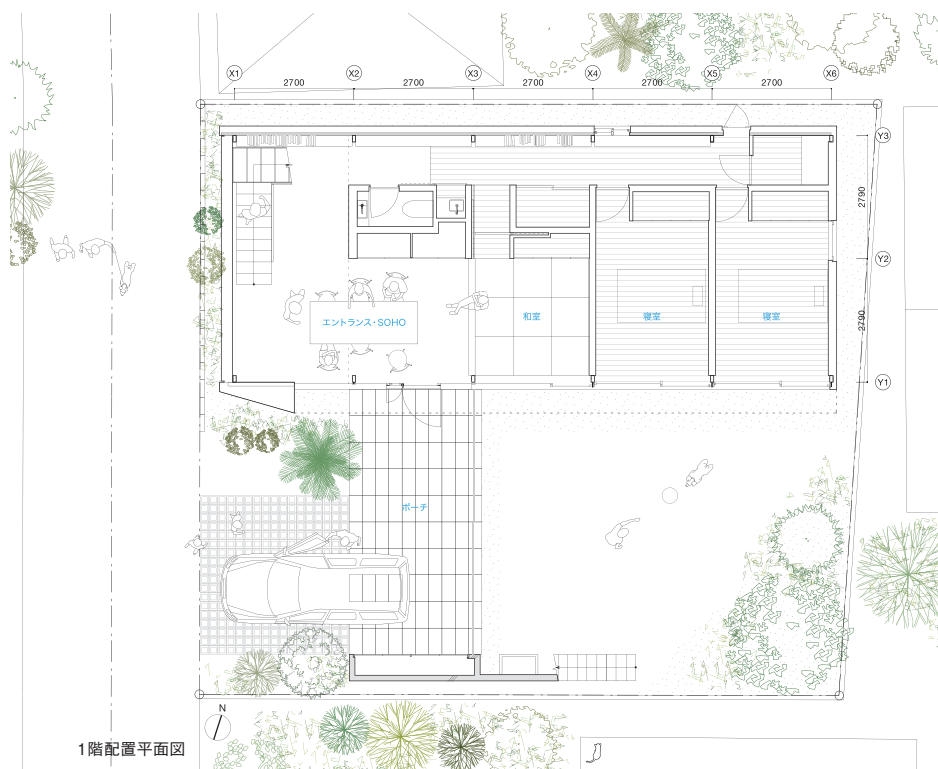
前面道路に対して敷地をほぼ二分して建物と庭が配されている。前面道路から駐車場、テラスの下のポーチが



テラスから建物全体を見る。南東側はほぼ開口面。



2階平面図



1階配置平面図

続き、その先に庭がある。テラスの下はグレーチングの可動扉となっており必要に応じて街との関係が変化できるようになっている。例えば、日常的には家族やその友人たちのみが使用するプライベートな空間であるが、イベントや災害時には可動扉を開けて地域に開放しパブリックな空間にすることが考慮されている。庭という一つの空間を状況に応じて性質の異なる空間に変化させることで街との繋がりが隠された目に見えない仕掛けとなっている。

－ 景観との兼ね合い －

建物一階部分は前面道路に対して壁で街と遮断されているが、2階部分は



エントランス・SOHOから1階の和室、2階のリビング・ダイニングを見る。

天井までの全面がガラス張りで開放的なデザインだ。実はこの2階から正面を見ると視線の先には空地が続き、さらに空地の奥には近隣公園の高木が見える。また敷地内は前面道路に対しては中低木の樹木を、庭にも多様な低中高木の多様な樹木を植えることで周辺のまちなみに馴染むような配慮がされている。

このように敷地と地域との関係を考える上でその土地に秘められた土地柄を感じ取り、そこに建築を入れ込むことにより街と呼応した建築となっている。

時とのつながり

一般的に竣工時が建物の完成とされる。しかし建築自体はそこで終わらないと原田夫妻はいう。竣工は工事完了に過ぎず、竣工後に住むことが始まり住むことにより建築は完成させていくものであり、この自邸も住み続けていく中でリフォームなどを通して変化し続けるであろう「終わらせない仕掛け」がいくつか隠されている。

－ SOHO －

テラス下のポーチは家のエントランス

に続き、室内に入るとSOHOという空間があり四畳半の小上がりの和室がある。当初は仕事の打ち合わせの場や近隣の子どもの放課後の居場所や小さな教室などに活用できると考えて設えたが、将来的な使用方法として麻魚氏は「近所の人や知り合いを招いて食事を提供してみたい」「SOHOと和室でお葬式もできると思う」と話し、真宏氏は「スクリーンを利用して気の合う仲間とサッカー観戦もできる」と楽しそうに語る。このSOHOはその時々で多様な使い方のできる可能性のある空間だということがわかる。

－ 子ども部屋 －

2階の子ども部屋は将来的に間仕切りで二部屋に出来るようになっている。そして子ども部屋にはロフトがあるものの階段がない。これは敢えて未完にしておき「ロフトを使いたければ子どもが自分で階段をつくらなければならない」ことになっているそうだ。建築家として親として子どもに完成品を与えるのではなく、子ども自身が自ら考えて手を動かして自分たちで部屋を完成させる仕掛けとなっている。

一般的には建築は工事完了の竣工時が完成となるが原田夫妻は「住み続ける中で生じる生活スタイルの変化に応じて空間も変化し続ける。それが自然であり完結させないことで空間をカスタマイズできる自由度が生まれる」と話す。この自邸のように出来上がっているようで未完であることが「終わらせない仕掛け」なのである。

塗装ガルバリウム鋼板の魅力

“素地の家”の外装でひと際目を引くのが塗装ガルバリウム鋼板の屋根である。なぜなら、10m以上の幅がある屋根に葺かれた塗装ガルバリウム鋼板に継ぎ目がないからである。施工方法は塗装ガルバリウム鋼板をカットされる前のロールの状態現場に搬入し、建物の奥行きと同じ奥行きを利用して現場でカット。そのまま屋根に持ち上げたという。鋼板面に現れた長尺板ゆえの微かなたわみに、程よい手仕事感が感じられる美しい屋根に仕上がっている。また北側の外壁も屋根同様、継ぎ目なしの1枚板が横一本で葺かれており、



子供部屋から南西側を見る。開口面から空地奥の近隣公園の高木の景観を室内に取り込む。

のだろう。真宏氏はその場所に適した住まいの可能性に必要なのは完成された家ではなく自由に改変できるフレキシブルな建物であり、それを「木の洞」に例えてくれた。木の洞(家)は「見晴らしは良いが、他者からは見られない場所」であることが適所である。「素地の家」はまさに「2階からの」見晴らしは良いが、「1階部分は」他者からは見られない場所、「室内から庭の」見晴らしは良いが、「前面道路から庭は」他者からは見られない場所」であり、木の洞であるといえよう。

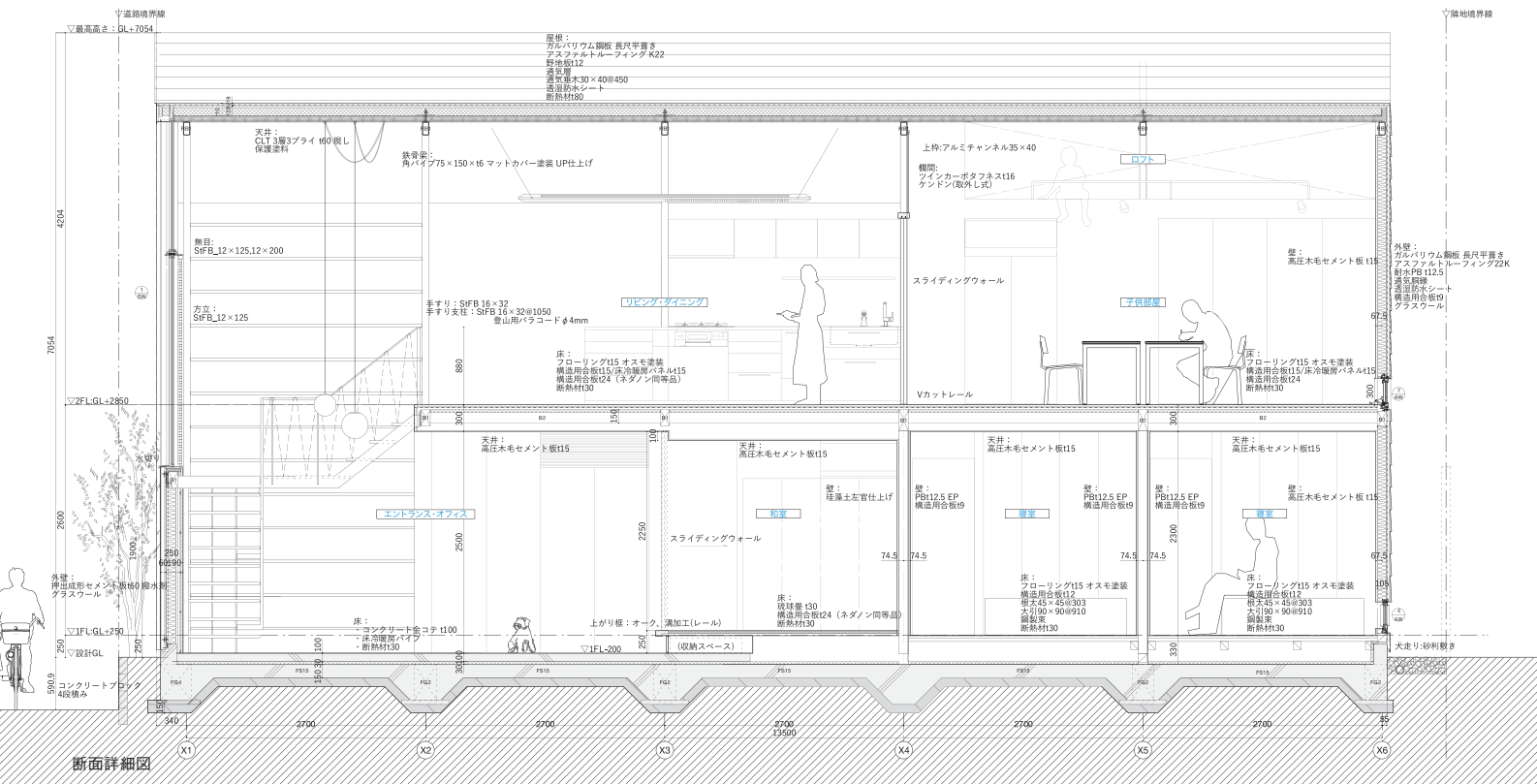
また建築の可能性についても、庭にしてもSOHOにしてもプライベート～セミパブリック～パブリックな空間に変容可能な多様性を持ち合わせており、その変容可能さこそが建築の可能性であり「なんでもできる空間」なのではないだろうか。

『拘らないこと』に拘る』ことを具現化した建築(家)とは、まさに変容可能な「素地」そのものである。住まい手の変化や時の変化により、この“素地の家”がどのように住みこなされていき住み続けられて行くのかがとても楽しみである。

屋根から外壁にかけて均一に連なった長尺板はデザイン的にも端正な仕上がりとなっている。このような屋根から外壁まで統一された横一本葺きの仕上がりの良さは板金職人の技術的蓄積によるもので、建築家が考え描いたデザインを要望通りに加工できる熟練された板金職人と出会うのも楽しみだという。ちょっとした隙のある素材だからこそ物質感を感じ、工業製品で

ありながらも自然素材に近いものを感じ取れることもまた、塗装ガルバリウム鋼板の魅力のようだ。

登山が趣味の真宏氏とマリンスポーツが趣味の麻魚氏は自然から建築のインスピレーションを得ることもある。それは「場所柄を読む」ことの原点であり、その場所に適した住まいの可能性を見つけることを建築家として楽しんでいる



設計：MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO / 原田 真宏 + 原田 麻魚
 株式会社マウントフジアーキテクトスタジオ一級建築士事務所 / 〒151-0053 東京都渋谷区代々木5-59-5 清水代々木ビル 2F
 [tel] 03-5738-1800 [fax] 03-5738-1801 [e-mail] info@fuji-studio.jp [URL] http://fuji-studio.jp/
 レポーター：東京大学 大月研究室 深見 かほり

三兄弟の合流

藤森研究室

担当 丸山^{もとこ}雅子

1891年6月、T・J・ウォートルスはニュージーランドを離れた。ニュージーランドで活動した期間はわずか6年と短かった。そのためニュージーランドでも彼は無名の存在である。ニュージーランドの鉱業史はもちろん、ウェストポートの郷土史においてすらほとんど認知されていない。だが、彼が成し遂げた業績は決して小さくはなかった。

石炭会社の技師として、彼が担当した炭砒は、1887-88年に出炭高がニュージーランド全体の3分の1を超えるまでに発展した。彼が特許を取得した「チェーン・クリップ」は、半世紀以上にわたってニュージーランドの鉱山で一般的に使用されたという。1888年から金鉱業にも関わるようになり、数社で指導的立場にあった。ウェストポート港の築港工事では、ウェストポート着任から離れる直前まで深く関与した。クライストチャーチ大聖堂の尖塔の修復工事では、彼の助言が採用された。

ニュージーランド最後の年にウォートルスの一家は頻繁に移動している。図に一家の移動の記録を示す(注1)。年初にウェストポートを離れているのは、労働争議の影響かもしれない。もちろんこのほかにも、ウォートルスは仕事で移動することがあった(注2)。ニュージーランド最後の半年は、慌ただしく過ぎていったようである。

1891年6月19日にウォートルス一家はオークランドを立ち、二度とニュージーランドに戻ることはなかった。ホノルル経由で7月9日の午後サンフランシスコに到着し(注3)、パレスホテルに滞在したとみられる(注4)。

米国では弟たちが待っていた。ここからは三兄弟を区別するために、長男のThomas James Waters(1842年生まれ)をトーマス、次男のJohn Albert Robinson Waters(1846年生まれ)をアルバート、三男のJoseph Henry Ernest Waters(1851年生まれ)をアーネストとする。ちなみに家族間では、トム(Tom)、バーティ(Bertie)、アーニー(Ernie)と呼び合っていたようである(注5)。

前回兄弟が揃って働いたのは日本で、1874年から75年にかけてのことだった(2018年冬号)。あれから十数年が経っていた。日本では、トーマスが活動の中心だった。彼の日本での成功に引き寄せられるようにして、弟たちはやって来た。

アルバートは1868年来日した。それまでに彼はさまざまな職種を経験している。商船会社に雇われ蒸気船の船員だったこともあった。兄と同じように、グラスゴーのランド

ルフ&エルダー社(2018年秋号参照)で見習いをしたこともあった。父親のように、ベルファストで医学を志したこともあった。その後、母方の家業である製糖機を海外に設置するため、1867年6月以前に英国を発ってフィリピンに向かった(注6)。フィリピンに彼がどのくらいいたかはわからない。同じ1867年に短期間、香港の英国海軍造船所で働いた可能性がある(注7)。1868年、69年には長崎で、上海の商社ホール&ホルツ社の長崎店を任されていたようである(注8)。また同じ時期に、長崎の高島炭坑で、「機械方・惣心遣(監督)」として働いていたと考えられている(注9)。

兄が東京に拠点を移した後、彼も東京に移動した。1872年5月から東京府建築掛に二年契約で「建築方」として雇われ、銀座煉瓦街の工事に携わった。併行して、兄の製紙業を「機械技師」として手伝った。

1874年8月からは民間に雇われた。三条実美の家令丹羽正庸に、契約の更新を重ねて1876年8月までの二年間雇われた(注10)。それより前の1873年に丹羽が興した品川のガラス工場に、兄と鉱山技師のエラスムス・ガワーが関わっており、その繋がりとみられる。アルバートが赴任したのは群馬県下仁田の中小坂鉄山だった。

中小坂鉄山については、「六年十二月又之ヲ全府士族丹羽正庸ニ譲與ス正庸乃チ英國人「ガール」ヲ傭ヒ以テ工部トナシ舊爐ヲ廢シテ蒸氣器ヲ据設シ鑛鑪ヲ改築シ更ニ英國人「ウォートルス」ヲ傭ヒ以テ之ニ委託シ工事落成ス」と『工部省沿革報告』にある(注11)。中小坂鉄山についてこれまで書かれた文章では、この「ウォートルス」をアーネストとするものが多い。だが、当時の資料を調べると、アルバートであることがわかる。例えば、当時東京府が作成した外国人リストには、月給「金四百五十拾円」、国名「英國」、職業「鉱山土木師」、姓名「チョン、アルベルト、ロビンソン、ウォートルス」、住所「上州甘楽郡中小坂村」とある(注12)。当時日本で発行されたディレクトリーには、「Kotsuke(上野国)」に「Waters, J.A.R., C.E., Shimonitta(J・A・R・ウォートルス、土木技師、下仁田在)」がいる(注13)。海外の文献では、政府のお雇い外国人だったH・S・マンローが1876年に発表した報告の中で「At Nakaosaka, in Kamura kôri of Gumma ken, where Messrs. E. H. M. Gower and J. A. R. Waters, English engineers, have erected a blast furnace for a Japanese company(群馬県甘楽郡の中小坂では、英国人技師のE・H・ガワーとJ・A・Rウォートルスが日本の会社のために高炉を建設した)」と述べている(注14)。

丹羽のために中小坂鉄山の高炉を含む設備の計画をたてたのがエラスムス・ガワーで、工事を担当したのがアルバートだったのであろう。後にトーマスが高島炭坑で働いたとき、高島炭坑で働いた経験のあるエラスムス・ガワーがトーマスの近くにいたことが思い出される(2018年夏号)。

トーマスもアルバートも元は製糖機の技師として東アジアに渡来し、日本で建築、土木技師としての経験を積み、炭砒や金属鉱山で働くようになったのである。これはエラスムス・ガワーと弟アーネストの影響が大きいと考えられる。

アーネストは1873年に鉱山技師として来日した。トーマスより9歳若く、トーマスからの仕送りの恩恵を受けて育った。トーマスとアルバートの学歴はよくわからないが、アーネストは英国ロンドンの王立鉱山学校(Royal School of Mines)と

ドイツのフライベルク鉱山学校(Bergakademie Freiberg)の両方で学んでいる。特に後者は鉱山界の名門で、出身者は世界中の鉱山で活躍していた。アーネストは1871年から72年にかけてフライベルク鉱山学校に在籍し、化学と分析学を担当する教授から格別の指導を受け、別の教授からは鉱山監督法を学んだというが、卒業はしていない(注15)。フライベルクには二年もいなかった。1873年5月にフランスのパリで、日本政府と三年間の雇用契約を結んでいる。職務は「鉱山副師長」で、最初の年は年俸千ポンド、二年目は千二百ポンド、三年目は千二百ポンドという取り決めだった(注16)。8月末に来日したが、一番頼りにしていたトーマスは英国に帰省中だったので、アルバートが彼を出迎えたはずである。

着任して一か月後に大島高任らと西国の鉱山巡検に出かけるが、「副師長ハ腹痛ニ因テ入坑セズ」、「副師長病氣今日モ宜カラズ」と、大島高任の日誌にはアーネストについてネガティブな記録しかない(注17)。因みに上司である鉱山師長のゴッドフレーもフライベルク出身者だった。アーネストに少し遅れて雇用されたC・A・ネットーもL・ビアンキーもフライベルクの出身で、アーネストより年上でフライベルクの在籍年数も長かった(注18)。「副師長」のポストは、アーネストにはまだ早かったのではなからうか。結局一年足らずで、「現今不要ニ属シ候ニ付」解雇された(注19)。

アーネストのお雇い外国人時代について、1891年の米国の鉱山業界紙は、「In 1873 he was appointed Mining Engineer to the Japanese Government, and this post he filled for two years to the full satisfaction of the government employing him (1873年彼は日本政府の鉱山技師に任命され、二年間その職を務め、政府を完全に満足させた)」としている(注20)。事実とは多少異なるが、このような説明がしっくりするほど、1891年までにアーネストは米国コロラドで鉱山技師として名を成していた。



図 ウォートルス一家の1891年の足どり
新聞の船客名簿によると、1891年前半に、ウォートルス夫婦と三人の子供たちの一行が頻繁に移動している。家族は使用人を連れて移動したようである。ほとんどの場合で、家族5人に加えて「nurse」または「servant」または「maid」の同伴者が記載されている(注1)。

さて、トーマスがニュージーランドを離れるとき、ウェストポートから同じ船に乗っていたロマスが政府にスカウトされたことは前回述べた。だが本当に政府が引き留めたかったのはトーマスの方だったと筆者は考える。なぜなら、政府が用意していた任務は、ニュージーランドの全ての鉱山を視察し報告することで、ただの坑夫にすぎないロマスには明らかに荷が重過ぎる(注21)。もしあのときトーマスがニュージーランド政府のオファーを受けていたらどうなっただろうか。職務に忠実なトーマスのことである。ロマス以上に出世したにちがいない。

だが結果的には、渡米することを選んでよかったのだ。そうでなければ、三兄弟が揃って働くことはなかっただろう。不幸な死がアーネスト夫妻に訪れるまで、あと二年もなかった。

(注)

- 1 『New Zealand Herald』1891年6月19日, 4頁. 同6月22日, 4頁. 『New Zealand Times』1891年1月27日, 2頁. 同6月15日, 2頁. 同6月19日, 2頁. 『Lyttelton Times』1891年1月27日, 4頁. 『Star (Christchurch)』1891年3月24日, 3頁. 『Press』1891年3月31日, 4頁. 『Evening Star』1891年1月28日, 3頁. 同3月23日, 3頁. 『Otago Daily Times』1891年1月29日, 1頁ほか
- 2 1891年2月14日にダニーデンからティマルに向かった特急列車の乗客名簿に、WCCの重役たちの名前に混じって「Thomas Waters」の名がある。また、2月23日にウェリントンを出港して25日にダニーデンに到着した船にも、WCCの重役たちと一緒に移動する「Waters」がいる。二件は同じような顔ぶれであることから、後者の「Waters」もThomas Watersの可能性が高い。この年は2月11日にWCCの年次総会がダニーデンで開かれている。例年、総会の後に重役たちによる現地視察が行われていることから、この移動はそうした視察旅行の一部かもしれない。『Star (Christchurch)』1891年2月14日, 3頁. 『New Zealand Times』1891年2月24日, 2頁.
- 3 『San Francisco Morning Call』1891年7月10日, 6頁.
- 4 新聞に掲載された「Hotel Arrivals(ホテルにチェックインした客のリスト)」のバレスホテルの項に、「T Waters & w. England(イングランドのT・ウォートルス夫妻)」がいる。出典は前掲書。
- 5 メグ・ヴィーヴァーズ『An Irish Engineer』2013年.
- 6 前掲書
- 7 フィリピンも含めた東アジアのディレクトリーの1867年版に、フィリピンではなく、香港の英国海軍造船所(H. M. Naval Yard)に、技師の「A. Waters」がいる。そして前後の年のディレクトリーには、イニシャルがAのWatersは見当たらない。つまり、「A. Waters」なる人物は、1867年までに東アジアの外からやってきて、短期間だけ香港にいて、どこかに行ってしまったことになる。そしてアルバートは1867年にイングランドから東アジアに来た。前述したようにアルバートは造船会社で働いた経験がある。造船所にいた「A. Waters」は本人の可能性が高いと思われる。『Chronicle and Directory for China, Japan, & the Philippines 1867』
- 8 当時のディレクトリーによると、上海のホール&ホルツ社(Hall & Holtz Co.)は船の取り扱い業者(ship Chandler)で、1868年、69年に長崎にも店を出している。その事務員(clerk)に「John Waters」と「Charles Gray」の名がある。ヴィーヴァーズの著書によると、アルバートのイングランド時代の親友で、船の販売に携わっていたCharles Grayが1868年に三兄弟の姉のルーシーと結婚している。ホール&ホルツ社長崎店の「John Waters」と「Charles Gray」は本人たち間違いなさそう。『Chronicle and Directory for China, Japan, & the Philippines 1868』、『同 1869』
- 9 堀勇良「補論ウォートルス考」『横浜と上海 近代都市形成史比較研究』1995年, 334頁.
- 10 『府下居住外国人明細表・甲』明治10-11年. 東京都公文書館所蔵
- 11 大蔵省「工部省沿革報告」1889年, 331頁.
- 12 『府下居住外国人明細表・甲』
- 13 『The Japan Gazette Hong List & Directory for 1875』、『同 1876』.
- 14 Henry S. Munroe『The Mineral Wealth of Japan』『Transactions of the American Institute of Mining Engineers』第5巻, 1876-77年, 269頁.
- 15 吉田國夫「鉱山副師長ウォートルス余聞」『日本鉱業史研究』53号, 2007年.
- 16 「英人副師長ウォートルス外一名来航」『太政類典 2編』72巻. アーネストの鉱山寮雇入および雇止の資料と、アーネストの渡航の記録は堀勇良さんのご教示による。
- 17 大島信蔵編「大島高任行実」1938年, 764頁.
- 18 吉田國夫, 前掲論文.
- 19 「英人副師長ウォートルス外一名雇止」『太政類典 2編』72巻.
- 20 『Engineering & Mining Journal』52巻8号, 1891年8月22日, 213頁.
- 21 『Grey River Argus』1891年7月11日, 4頁. 『Evening Star』1891年7月22日, 2頁.

街でみかける ファインスチールの施工例 その51



とみおかアーカイブ・ミュージアム

2021年7月11日、屋根材に塗装ガルバリウム鋼板が使用された『とみおかアーカイブ・ミュージアム』が福島県富岡町にオープン。「複合災害を地域の歴史に位置づける」をテーマに、東日本大震災と原発災害で生じた震災遺産を紹介している。

地域で長い時間をかけて積み重ねられてきた日常が覚悟なく奪われた事実を生活者の目線から伝え、「あの日」を境に起きた町の変化を展示。3.11からの町の10年間、町民の被災・避難経験談、当時の中学生の証言を元にしたアニメーションのシアター動画(3本)に加え、プロジェクションマッピングで町の被災状況や避難指示区域の変遷、避難経路などを説明している。震災を町の歴史の一部として位置づけ、地域や町民の暮らしがどのように変わってしまったか、津波の脅威を後世に伝える重要な役割を果たしている。なお、展示はすべて町の学芸員が担当しており、希望があれば展示解説が受けられる。





2 マルホンまきあーとテラス

2021年4月に開館した「マルホンまきあーとテラス 石巻市複合文化施設」は、震災で被災した市民会館および文化センターが生まれ変わり、文化ホール機能を有する芸術文化センター、博物館機能を有する石巻市博物館からなる複合文化施設として石巻市に10年ぶりに再建された。文化施設であると同時に、復興のシンボルとして市の新しいランドマークになることを期待された建物は地上4階建てで、特徴は真っ白な正面の外観。無機質になりすぎず、巨大な面の圧迫感が出ないよう外装には3色の異なる塗装ガルバリウム鋼板が使用されており、壁には雨水が流れやすいよう金属板を縦に張り、汚れが付きにくい工夫が施されている。白い家並みのような外観をしているため、遠くから眺めると緑の中に「白い街」が出現したかのようにも見える。建設場所選ばれたのは、多くの市民が住居を失ったために建てられた仮設住宅が建ち並んでいた場所で、いくつもの家が連なったような形は、昭和初期の頃の旧北上川沿いに建ち並んでいた家々の風景をなぞらえたものとなっている。5つの屋根が並び、工場の煙突のような部分もあって、一つの建物が街の風景を映し出している。



FINE STEEL!

ボクらは
「自在に変化」
進化した鉄!

ボクらは「自在に変化」進化した鉄!

ファインスチールは、鉄の長所を最大限に活かしながら、これからの家と暮らしにふさわしい特長を合わせ持つ、現代建築の最適な素材として注目を集めています。新しい住まいで始まる暮らしをより良いものに。ファインスチールが理想のカタチを実現します。

ボクらの
特長

地震につよい 表面がきれい 環境にやさしい

屋根材・壁材には **ファインスチール**



全国ファインスチール流通協議会

<http://www.zenkoku-fs.com>

